

薬事日報社 村嶋哲

三輪さんに寄稿をお願いしたいと考えたのは、宇部市で行った講演資料に感銘を受けたのがきっかけでした。「面白い方なのだろうな」。すぐに寄稿をお願いしました。その直感は見事に的中しました。

「クロマトグラフィーとは何か」

「クロマト工程のイノベーション、3クリックで斬る」

一般の人たちはおろか、医療に携わる方々、製薬業界の方々にも認知されていないクロマトグラフィー技術を、「分かりやすく」「ユーモラス」に伝えていく。ただ、この2回は序章に過ぎません。

第3回「戦力外通知、トラになると決めた日」から物語はやや暴走気味に、意外な方向へと進み、第4回「書くことへの“恐れ”を知り、それでも書く意義」で三輪さんは開眼します。

印象的だったのは、このフレーズです。

「クロマトグラフィーという科学技術について「分かる」と「できる」のサイクルを回し続けることで、さらに自信を深めていった。その技術の価値は、客観的に「伝える」ことでようやく理解してもらえる」

第5回「破れかぶれ・クロマトバカ野郎の逆襲」で周囲からの評価を獲得し、第6回「劇場型“イノベーション”に、心を削る」で起業（卒業？）というフィナーレを迎えました。雑草魂を持ったサイエンティストが表現者に転化していく“三輪さんの物語”として見事に仕立て上げました。

医薬品の社会的価値が問われる時代を迎えています。研究者にとって専門性を突き詰め、価値の高い研究成果を挙げることはゴールなのかもしれませんが、その研究成果が社会にとってどれだけ意味があるのかを伝え、国民1人ひとりを巻き込む劇場型のイノベーションの実現は製薬業界が理想とする未来です。市民中心、患者中心のイノベーションには、まさに研究者の表現力、発信力が求められます。

経営者、表現者である三輪さんの続編に期待しております。

薬事日報 大津弘之

この度は全6回におよぶ連載をお忙しい中執筆いただき、誠にありがとうございました。

今回の連載についてですが、正直なところ三輪さんにお会いするまで、私自身がクロマトグラフィーというものについて全く不勉強の状態でした。そんな中で創薬研究活動を効率化の上でボトルネックとされるクロマトグラフィープロセスすべてを自動化、脱属人化、高速化する「仕組み」を提供するという三輪さんのお話に大変興味を持ち、何かの形でそれをより多くの方に知っていただくお手伝いができないかというところからスタートしました。

私が三輪さんの活動に興味を持ち、かつ共感した点として、

- ① 「仕組み化」というのは、創薬プロセスはもちろん、あらゆる場面に必要であること
- ② クロマトグラフィーが創薬研究の過程において比較的マイナーであること
- ③ 周囲には不可能と言われながらも、クロマトグラフィーの仕組み化に成功しクライアントにたいして実際に成果を提供していること
- ④ 三輪さんがロジカルでわかりやすく、かつパッションを込めて発信できる方であること

など言い尽くせませんが、特に医薬品が上市するまでの様々なプロセスにおけるマイナーな仕事にもスポットを当てている点は、私たちが日頃紙面や企画を通して読者の方々に伝えたい点で完全にマッチしており、何より三輪さんのキャラクターとご経験、そして読者を引き付ける文章力あれば、ある意味で薬事日報っぽくない？連載になるのではと考えました。

その予想を上回る内容と、雄弁な語り口で連載をご執筆いただき、お陰様で読者の方にも多数の反響をいただけたことに心より感謝しております。

今後も三輪さんとは業界の発展のためにいろいろな記事や企画と一緒に創作していきたいと考えております。引き続きどうぞよろしく願いいたします。